

人生ハンド仏句

第25号

H. 16. 4. 1

(毎月1日発行)

編集・発行
玉蓮山寺
真成部
編集部

☎・FAX (0765)
22-2268

メールアドレス

kokorochanthk@

人の寿命は

無常なり

住職 谷川寛俊

新聞やテレビで毎日のように交通事故や過労による働き盛りの中年の突然死又最近特に冷酷で残虐な凶悪犯罪によって命を失われる方々等、思えば誠に人ごととは思えない肌寒い感じが致します。私達は、何気なく、今日元気であれば明日も必ず元気だろうという思いで日々仕事に追われ、あくせくと一日一日を過ごして

おります。時々自分もいつかは死ぬと言うことは、頭で理解しているつもりでも、現実問題として余程の大病人でもない限り、死は他人事か自分には縁のないもの、これが正直成るところではないでしょうか。日蓮大聖人は「妙法尼御前御返事」に（人の寿命は無上なり。出ずる気入る気を待つことなし・・・）。されば先ず臨終のことを習うて後に他事を習うべし」と述べられ、人の寿命の無常はいつなんどき襲い来るか、老若男女、賢愚、貧富、貴賤、美醜の別も無いと教えられております。

お釈迦様が「広野の旅人」に例えて、お説きになったお話に、遠い昔果てしない広野を一人の旅人がとぼとぼと歩いていると、後ろに恐ろしい荒れ象が迫り来て、彼は夢中で走り出した。「もう、だめだ」と思ったその時、大きな井戸を見つけた。幸いなことに、井戸の真ん中に藤の枝が垂れ下がっていて、旅人はスルスルと入っていき、九死に一生を得たのですが、下を見ると大蛇、上の藤の根元を二匹の白と黒の鼠がかみ切っている。さらに井戸の壁から毒蛇の子が舌をペロペロと出して迫り、恐怖に震え、顔は青ざ

めた。その時彼の口の中にポトリと上の方から甘味の蜂蜜がしたたり、恐ろしい苦しみの中で蜂蜜のうまさに酔っている時、もっと恐ろしいことが起こり、この広野が今、野火のため炎々と燃え盛っていることでした。

この譬えの広野とは、迷いの世界であり、旅人は三世に亘る永い人生であり、大蛇は人間には遅かれ早かれ死というものが大口を開けて待っているの譬えであり、蜂蜜を楽しむのは私達が眼、耳、鼻、舌、身、意の六感の享樂にふけっている有様を意味しているものです。

日蓮大聖人の「習う」というのは学ぶことです。臨終の有り方、死に様は如何に有るべきかを学べと

たった一つのふくれ顔
まわりのみんなを暗くする

教えられているのです。先ず臨終のことが解れば、おのずと他事、つまり己の生き方が解るのだと説かれております。昔から人の価値は死後になつて初めてハッキリ決まると言われております。この教えを事実自分の事として受け止め、人間いつ臨終を迎えるかは解りませんが、一日一日時々刻々を大切に生きてゆきたいものです。